

第 45 糖尿病学の進歩イブニングセミナー

母子を糖尿病から守る予防キャンペーン —妊娠前における糖代謝異常検出への期待—

海老名総合病院・糖尿病センター長
(東京女子医科大学名誉教授) 大森安恵

歴史は時の流れとともに真実をゆがめていくので、グリコアルブミン (GA) を用いて、日赤献血時に糖尿病スクリーニングが実施されるようになったいきさつと、母子を糖代謝異常から守る事の重要性について述べる。

国際糖尿病連合 (IDF) は、増え続ける糖尿病対策として国連 (UN) と協力し、Unite for Diabetes を作り 2006 年 12 月 20 日国連決議が採択された。IDF はこの採択の前に高齢者糖尿病、移民、原住民、小児・ヤング、妊婦の糖尿病を対象として五つのワーキンググループを作り、各群 6 名の専門委員を世界各国から選出、活動させた。私は妊娠班の一員に選ばれ 2 型糖尿病が主流を占める国の糖尿病と妊娠対策をどうするかについてニューヨーク国連でのスピーチを依頼された。

妊娠してから糖尿病が発見されると、奇形児が多く、母体は糖尿病合併症に苦しめられる事になる。私は数年前から、日本糖尿病・妊娠学会と日本糖尿病財団の各理事長中林正雄、金澤康徳両先生に協力して頂き、糖尿病予防キャンペーンの一端として「母子を糖尿病から守ろう」という運動を初めていた。成人式を迎えたら健診を受けようと提案し続けていたので、国連では政府主導の健診と教育を普及させようと主張した。2007 年 2 月の事である。

糖尿病週間にパンフレットを配布するだけでは実績を積み重ねる事は難しく、国連で行ったスピーチの責任と使命感が常に脳裏を占めていた。偶然なことに日本赤十字社の献血の際、糖代謝に関するチェックがなされていない事を知り、これが実現すれば老若男女かなりの糖尿病スクリーニングが出来ると踏んだ。

実際に日赤本社との交渉、連携はすべて日赤血液事業審議会委員の中林理事長に依頼した。日赤は私の発案、私達の申し入れを快く受け入れてくれた。献血時の糖代謝検査は、分注の必要がなく、HbA1c より廉価な旭化成のグリコアルブミン (GA) を用いることになった。日赤の献血者は年間約 500 万人で、若年者は 250 万人、その半数の妊娠可能な年代の女性は 125 万人で、献血と同時に糖尿病に関するチェックが受けられる事になる。

2009 年 3 月から日赤ではこの事業を開始しもう既に膨大なデータが集積されつつある。

2009 年 4 月一ヶ月間の成績は、総献血者 41 万 5000 人、糖尿病が疑われる GA 値を 16.5% 以上とするとその頻度は年代、男女差によって異なるが 16 歳から 39 歳までの女性の一ヶ月の献血者は 8 万 3500 人、糖尿病の疑いのある人達はその 0.7% であった。

糖代謝異常を指摘された人々のその後の管理はまだ明らかでないが、糖尿病の早期発見、予防、ひいては母子を糖代謝異常から守る福音として大きな貢献が期待されるのである。